

子ども空間安全チェックリストの作成と有効性の検討

—インタビュー調査を通して—

櫻井 貴大¹ 横田 典子² 野田 美樹³ 林 陽子⁴

Takahiro Sakurai¹ Noriko Yokota² Miki Noda³ Youko Hayashi⁴

[要旨] 多くの保育現場で、安全を保障するためにチェックリストが活用されている。しかし、子どもの安全を保障する上でマニュアルの作成や安全点検の実施だけではなく、全職員が共通の意識をもち安全管理に取り組むことが重要とされている。そこで、本研究では、リスクとハザードという観点から、何が防がなければいけない事項で、何が子どもの成長に繋がるのかを意識し、園内の保育者間で共通認識をもつことのできる「子ども空間安全チェックリスト」の作成を目的とする。そして、作成した「子ども空間安全チェックリスト」について、インタビュー調査を用いてその有効性を検証した。その結果、子どもの行動規制により危険を取り除くのではなく、子ども自身が考えることのできるような声掛けをする意識と援助の変化が見られるなどの有効性が確認された。

[キーワード] 子ども好適空間安全チェックリスト, リスク, ハザード

[Key words] an early childhood care and education space safety check list, risk, hazard

[所 属] 1,2,3 岡崎女子短期大学 (Okazaki Women's Junior College) 4 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学 (Okazaki Women's University, Okazaki Women's Junior College)

1. 問題と目的

平成30年版の消費者白書に「子どもの事故防止に向けて」という特集が掲載された¹⁾。その特集に示されるように、現代社会において、子どもの死亡や事故の原因は不慮の事故が多く、家庭や身近な場所で発生している。厚生労働省「平成30年人口動態統計月報年計(概数)」によると、不慮の事故は0歳の死因では3位、1~4歳、5~9歳では2位となっている²⁾。保育所、こども園、幼稚園等の保育現場における事故については、令和元年8月に公表された「平成30年教育・保育施設等における事故報告集計」によると、平成30年1月1日から平成30年12月31日の期間内に報告数は1641件であり³⁾、平成27年の事故報告制度の見直しや、平成28

年3月の「教育・保育施設等における事故防止及び事故発生時の対応のためのガイドライン」の通知、「教育・保育施設等における重大事故防止策を考える有識者会議」の設置等の取り組みが行われている等、喫緊の課題となっている。

筆者らは、岡崎女子短期大学研究ブランディング事業「子ども好適空間研究拠点整備事業」における「保育現場における危険事例とよりよい保育環境に関わるアンケート調査」の研究チームとして、“子どもにとって居心地が良く、夢中になれる空間”であるための環境について検討し、事故を防止するために役立つだけでなく、子どもの“夢中”を引き出すためにも役立つチェックリストの作成を試みている。平成26年に国土交通省より示された「都市公園における遊具の安全確保に関する指針(改訂第2版)」に「子どもは、遊びを通して冒険や挑戦をし、

心身の能力を高めていくものであり、それは遊びの価値のひとつであるが、冒険や挑戦には危険性も内在している。」⁴⁾とあるように、危険のない空間が必ずしも“子どもにとって居心地が良く、夢中になれる空間”ではない。筆者らが検討する“子どもにとって居心地が良く、夢中になれる空間”は、安心、安全な空間であると同時に、子どもの夢中を引き出すことで、心身の成長を促す空間であると考えている。

事故防止のためのチェックリストという点、田中(2019)が、事故防止対策の一つとして日常においてチェックリストを活用することの有効性を述べている⁵⁾。また、「教育・保育施設等における事故防止及び事故発生時の対応のためのガイドライン」の資料にも「設備等の安全に関するチェックリスト」、「遊具のチェックリスト」、「年齢別のチェックリスト」とあるように⁶⁾、具体的な項目が示されているチェックリストは既に自治体等で数多く作成されており、事故報告を提出した施設等でも9割以上の保育所・認定こども園、7割以上の幼稚園で事故防止マニュアルが作成され、施設の安全点検、遊具・玩具の安全点検についても9割以上の幼稚園・認定こども園・保育所が実施している⁷⁾。

一方で田中は、事故を減らすためには、事故報告書やヒヤリ・ハットなどのインシデント(事例)の報告による実態の把握、それらの要因を分析し、防止のための方策を検討し、実行するというPDCAサイクルを組織的に行う必要があるとも述べている⁸⁾。また、平成30年の『教育・保育施設等における重大事故防止策を考える有識者会議 年次報告』にも、死亡事故に至る保育プロセスを検証すると、丁寧な保育への共通認識やリスクへの意識が低い問題点が見られると指摘し、「全職員で保育を見直し、あるいは外部から助言を受けて、乳児保育の質を高めることが、事故の予防には重要である。」⁹⁾と示され、マニュアルの作成や安全点検の実施だけではなく、全職員が共通の意識をもち安全管理に取り組むことが重要とされている。

本研究の分担研究者である横田(2019)は、本研究のプレ調査として保育現場の実態を把握する「ヒヤリ、ハット」事例の収集およびそのデータベース化を行っている。ヒヤリ・ハット事例の収集については、伊藤ら(2017)が、「全国的な統計による重大事故場面と、時系列的にみて事故直前ヒヤリ・ハット場面とが内容的に類似事態である」¹⁰⁾ことを確認しており、事故防止の対策として有効であることが示

唆されている。調査の結果、横田は子どもの年齢や発達段階、園の設備環境、保育者の経験など、様々な要因によって、危険になりうる場所や物が異なることを明らかにした。その理由として、「何が防がなければいけない事項で、何が子どもの成長に繋がるのか」というリスクとハザードという理論的枠組みから、安全や危険の捉え方が保育者によって様々であり、整理されていない状況であると指摘している¹¹⁾。

これらの知見を踏まえ、筆者らはリスクとハザードを踏まえたチェックリストが必要であると考えた。その理由としては、各園の設備環境や子どもの姿、保育者の経験はそれぞれ異なることが予測されるため、その園独自の要因を踏まえた上で「何が防がなければいけない事項で、何が子どもの成長に繋がるのか、またどのようにして成長に繋げるのか」という視点で職員が共通の認識をもつことが各園の環境にあった適切な援助を行うことに繋がり、“子どもにとって居心地が良く、夢中になれる空間”を生むのではないかと考えたためである。

以上のことから、本研究では、①各園の設備環境や子どもの姿が反映できること、②リスクとハザードの整理ができること、③保育者同士が意見交換し、共通認識をもてることの3つの視点を含めた「子ども空間安全チェックリスト」を作成することを目的とする。そして、作成した「子ども空間安全チェックリスト」について、インタビュー調査を用いてその有効性を検証する。

なお、本研究で用いる「リスク」と「ハザード」の定義については、前述した「都市公園における遊具の安全確保に関する指針(第2版)」に準じつつ、保育者が保育現場の具体的な事例と結び付けてイメージしやすいように、リスクを「危険と感じるが、子どもたちの発達を促す要素が含まれるもの」、ハザードを「危険の大小に関わらず、子どもたちの発達を促す要素がなく今すぐ取り除くべきもの」とした。

2. 研究1 子ども空間安全チェックリストの作成

2-1 研究方法

調査協力者

A市の幼稚園・保育所・こども園の内、調査協力の得られた私立幼稚園1園、私立保育所4園、公立保

育所2園、公立こども園1園、計8園に勤務しているクラス担任をしている保育者全員に子ども空間安全チェックリストを実施。その後のインタビュー調査については、園長と3歳以上児のクラス担任をしている保育者、各園1名ずつ計16名に協力を得た。

調査時期

令和元年6月に子ども空間安全チェックリストを配布し、同年7月にインタビュー調査を行った。そして、改訂版の子ども空間安全チェックリストを作成し、同年10月に配布し、同年11月に再インタビューを行った。

実施方法・内容

調査協力が得られた8ヶ園に電話にて依頼し、後日、直接訪問して子ども空間安全チェックリストの説明と配布を行った。各園でチェックリストを実施し、園全体で話し合いの時間を設けることを依頼した。その後、協力の得られた16名に対して半構造化インタビューを行った。インタビュー内容は、子ども空間安全チェックリストを使用し使いにくい部分や理解が難しい部分について質問した。

分析方法

得られたインタビューを文字データ化し、子ども空間安全チェックリストを使用し使いにくい部分や理解が難しい部分について語られている部分を抽出し、コーディングを行った。

倫理的配慮

岡崎女子大学・短期大学研究倫理委員会にて審査のうえ承認された。さらに、研究協力者には①研究の目的②録音された音声は研究の目的以外には使用しないこと③答えたくない内容には答えなくても良いこと④インタビュー後であっても研究協力の取り消しが行なえること等について説明を行い了承を得た。

2-2 結果と考察

(1) 子ども空間安全チェックリストの課題把握

本研究で取り扱う子ども空間安全チェックリストは、横田(2019)の研究結果をもとに作成されたものである(図1)。しかし、実際にそのチェックリストが保育現場で使用した際にどのような課題があるのかを明らかにし、その課題を改善したものを子ども空間安全チェックリストとして配布するこ

ととした。

得られたインタビューデータの分析を行った結果、以下の結果が得られた(表1)

表1 子ども空間安全チェックリストの課題

子ども空間安全チェックリストの課題
リスクとハザードの区別が分かり難い
ハザードは取り除くべきものなのでレベルは必要ない
リスクのレベルの違いが分かり難い
物的環境のみに焦点を当てており子ども空間が意識されていない
どの程度記入すれば良いのか分からない
危険内容と要因、対応方法は別の方が良い

これらの課題を踏まえて、以下の部分について修正をした。(図2)

- ①子ども空間についての説明を記載した
- ②説明用紙だけでなく、チェックリストにもリスクとハザードやリスクレベルを記載した
- ③リスクレベルを園内で処置できる程度、病院に連れて行く程度など保育者が理解しやすい形の表現方法にした
- ④危険内容と要因と対応方法を別々に記載できるようにした
- ⑤ハザードのレベルは削除した
- ⑥記入する行を10行から3行に減らした

改訂を行った子ども空間安全チェックリストを研究協力園8ヶ園において、園長8名、保育者8名に再度使用した後に、改訂版空間安全チェックリストを使用した際に感じた使いにくさや理解のしにくさなどの課題についてインタビューを行った。その結果、使いにくい部分についてはほとんど語られなかったため、改訂版空間安全チェックリストを最終版空間安全チェックリストとした。

3. 研究2 子ども空間安全チェックリストの有効性の検討

3-1 研究方法

調査協力者

研究1と同じく、A市の幼稚園・保育所・こども園の内、調査協力の得られた私立幼稚園1園、私立

子ども空間安全チェックリスト

点検日	2019. .	点検者担当クラス	歳児	クラス	点検者氏名
場所	危険内容	リスク	ハザード	リスクやハザードの要因と対応方法	
		LV.1~3	LV.1~3		
		1・2・3	1・2・3		
		1・2・3	1・2・3		
		1・2・3	1・2・3		
		1・2・3	1・2・3		
		1・2・3	1・2・3		
		1・2・3	1・2・3		
		1・2・3	1・2・3		
		1・2・3	1・2・3		
		1・2・3	1・2・3		
		1・2・3	1・2・3		
		1・2・3	1・2・3		
		1・2・3	1・2・3		
		1・2・3	1・2・3		
		1・2・3	1・2・3		

図1 子ども空間安全チェックリスト

① 「子ども空間」とは
物的環境、人的環境だけでなく、**子どもの年齢や活動の状況**（同じ園庭あそびでも日中と夕刻で安全度が変化するなど）**も含む**ものを指します。

リスクとハザードとは
◇リスク・・・危険と感じるが、子どもたちの発達を促す要素が含まれるもの
◆ハザード・・・危険であり、今すぐ取り除くべきもの

リスクの危険度レベルとは ②
LV.1 園内で処置可能と予測される程度の怪我
LV.2 病院での処置が必要と予測される程度の怪我 ③
LV.3 生命に危険があるか重度あるいは恒久的な障害をもたらすもの

子ども空間安全チェックリスト（個人用）

点検日	2019. .	点検者担当クラス	歳児	クラス	点検者氏名
場所	危険内容と要因	リスク	ハザード	④ 対応方法	
		LV.1~3	ハザード		
		1・2・3	⑤ハザード		
		1・2・3	ハザード		
		1・2・3	ハザード		
記入例 園庭の築山	子どもたちが勢いよく駆け下りるため、ぶつかる危険性がある。	①・2・3	ハザード	築山には〇〇〇することにより〇〇する	
園庭の鉄棒	帰宅時に通園バッグをかけたままやスカートで鉄棒をしている子がいる。	1・2・3	⑥ハザード	各クラス〇〇〇を決めることにより、〇〇〇する。加えて、各クラスの保育者は〇〇〇したり、〇〇〇したりする。	

図2 最終版 子ども空間安全チェックリスト

※表3の①～⑥は修正箇所を示す

保育所4園、公立保育所2園、公立こども園1園、計8園に勤務しているクラス担任をしている保育者全員に子ども空間安全チェックリストを実施した。その後のインタビュー調査については、園長と3歳以上児のクラス担任をしている保育者、各園1名ずつ計16名に協力を得た。

調査時期

研究1と同じく、令和元年6月に子ども空間安全チェックリストを配布し、同年7月にインタビュー調査を行った。そして、改訂版の子ども空間安全チェックリストを作成し、同年10月に配布し、同年11月に再インタビューを行った。

実施方法・内容

研究1と同じく調査協力が得られた8ヶ園に電話にて依頼し、後日、郵送にて子ども空間安全チェックリストの配布を行った。各園でチェックリストを実施し、園全体で話し合いの時間を設けることを依頼した。その後、協力の得られた16名に対して半構造化インタビューを行った。協力者は研究1と同じ保育者に依頼し、このインタビューは研究1と同じ日に行った。インタビュー内容は、A市の既存のチェックリストと比較したメリット・デメリットについて、子ども空間安全チェックリストを使用して意識や考え方、環境の構成等について変化があったかについて質問した。

分析方法

得られたインタビューの文字データ化し、インタビュー内容は、A市の既存のチェックリストと比較したメリット・デメリットについて、子ども空間安全チェックリストを使用して意識や考え方、環境の構成等について変化があったかについて語られている部分を抽出しコーディングを行った。

倫理的配慮

岡崎女子大学・短期大学研究倫理委員会にて審査のうえ承認された。さらに、研究協力者には①研究の目的②録音された音声は研究の目的以外には使用しないこと③答えたくない内容には答えなくても良いこと④インタビュー後であっても研究協力の取り消しが行なえること等について説明を行い了承を得た。

3-2 結果と考察

(1) A市の既存のチェックリストと子ども空間安全チェックリストとを比較したメリット・デメリット

協力園8ヶ園において、園長8名、保育者8名にA市の既存のチェックリストと子ども空間安全チェックリストとを比較してメリット・デメリットをインタビューし、コーディングを行った結果、以下の結果が得られた(表2、表3)

表2 A市既存のチェックリストのメリット・デメリット

A市既存のチェックリスト	
メリット	デメリット
様式があるので誰でもチェックすることができる。	チェックリストに載っていない部分には目が向かない
2択なので考えなくても選択できる	作業的になり、安全意識が高まりにくい

表3 子ども空間安全チェックリストのメリット・デメリット

子ども空間安全チェックリスト	
メリット	デメリット
園の状況に合わせたチェックリストになる	書くことに時間がかかる
話し合うことで気づかなかった点に気付くことができる	話し合う時間が確保できない
話し合うことで園内の共通認識をもち安全対策を考えることができる	個人での対応を記入したところを読むだけの報告に終始してしまい、話し合いまで発展しない
話し合うことで他の保育者の思いを知ることができる	本音を言えない園内の関係があると上手く機能しにくい
リスクとハザードを区別して安全について考えることができる	リスクとハザードの違いについて正しく理解することが難しい
若手保育者の指導にも役立てることができる	まとめたものの活用方法が分かりづらい
定期的に見直すことができる	考えることに時間がかかる
危険だと思っていた部分について共通認識を園る機会になる	曖昧にしていた部分が明確化されることにより、子どもの遊びが制限される可能性がある
物的環境だけでなく、子どもの行動や状況を踏まえて安全について考えることができる。	クラスの状況や子どもの発達年齢によって一定ではない
危険内容と要因、対処方法が整理できる	
書くことによって、安全を意識するようになる	
書くことによって、安全に関する見る目が養われる	
過去の事例についても知り安全に気を付けるべき箇所が理解しやすい、思い出すことができる	

(1) 既存のチェックリストのメリット・デメリット

保育者の語り①

イエスか、ノーか、じゃないですけど。

保育者の語り②

リストでチェックしちゃう。だからそうするとそれ以上のことは思わないし、それ以下のことも思わない

これらから、既存のチェックリストはチェックする項目が決まっており、誰でも悩むことなくチェックすることができる【様式があるので誰でもチェックすることができる】。一方で、ルーティーン化してしまい、安全意識の高まりにはつながらない【作業的になり、安全意識が高まりにくい】ことが読み取れた。

(2) 子ども空間安全チェックリストのメリット・デメリット

ここでは、A市既存のチェックリストと比較して、子ども空間安全チェックリストのメリット・デメリットについて述べる。

保育者の語り③

自分で考えるので、より普段の保育に近い中で危険をチェックできるかなっていうふうには思います。

保育者の語り④

かなり具体的に書いているってことが特徴だった

子ども空間安全チェックリストは実際に保育者が危険だと思っている場所や状況を書き出していることにより、園の環境や状況、職員配置等を考慮した安全対策を考えることができると考えられる【園の状況に合わせたチェックリストになる】

保育者の語り⑤

こっちはどうしても文章を書くから、とっつきにくさっていうのは、ちょっとあるのかなとは思いますが。

具体的に園の環境や状況、職員配置等を考慮して書くことができる反面、文章にして書く必要があるため時間や労力は既存のチェックリストと比較して負担になるというデメリットを感じていることが考えられる【書くことに時間がかかる】。

保育者の語り⑥

普段だったら到底、分かりにくいようなところで、そういう危なさがここにはあるんだねって

保育者の語り⑦

あまり見に行くこともないから、たまにそうやって行くときに、ここが書いてあったところかと思って見たりとか、みんなで共有すれば、意識にもつながっていくのかなって

子ども空間安全チェックリストを自分自身で記入するだけでなく、他の保育者のチェックリストを見たり、話し合ったりする中で、今までは気付かなかった危険を認識することを可能にしていると言える【話し合うことで気付かなかった点に気付くことができる】。さらに、チェックリストに記載されていた部分について、普段見る機会の少ない場所における危険についても、話し合うことで意識的に確認したり、気を付けたりすることで、安全対策を考えるようになったと言える【話し合うことで園内での共通認識をもち安全対策を考えることができる】。

保育者の語り⑧

すごく大事なことなので話したいっていう気持ちはあってもなかなか、さあみんな集まって話し合おうっていう時間を設けるのもちょっと難しいなというふう感じたところがあります。

話し合うことで共通認識をもつことや今までは気付かなかった危険を認識することを可能にしている反面、日常的な書類作成や行事の準備、時間差勤務があることなどから、保育者が集まって話し合う時間を確保することが難しい状況もあることが明らかとなった【話し合う時間が確保できない】。

保育者の語り⑨

何となく、みんなの共通約束、共通感覚で、過ごしていたことが明確じゃなかったりとか。そういうのははっきりしたので、ちょっと、こういうふうにしていこうかということが、できるというか、見直すきっかけにはなったかなと思いました。

保育の現場ではおおまかなルールや約束事が決まっているものの、詳細な部分は各保育者の判断に任されていることもある。しかし、危ないと思っながらも、曖昧にしたままで放置されているものについて、子ども空間安全チェックリストによる話し合いによってルールや約束事が統一され、共通認識をもつことができたと考えられる。【危険だと思

っていた部分について共通認識を図る機会になる】。

保育者の語り⑩

私はこういう意見でとか、担任はその子の子ども
の発達分かるので、この子だったらきっと大丈夫
とか、違う子だとちょっと手、離しそうだなとかそ
ういうのが分かるから見ていられるけど。遅番の時
間っているんな保育士が入って普段、見ていない子
なので、そういうのも分からないし。結局いろんな
意見が出た結果、ルールを決めたほうがいいよねっ
てなって、渡るのはなしってなっちゃいましたね。

子ども空間安全チェックリストをもとにリスク
とハザードについて話し合うことにより、ルールや
約束事が決まり共通認識をもって安全対策ができ
る一方で、リスクであっても命に関わるケガにつな
がる可能性があるリスクレベル3の場合はその遊
びが禁止になってしまい、子どもの遊びや活動が制
限されることもあるということが明らかとなった
【曖昧にしていた部分が明確化されることにより、
子どもの遊びが制限される可能性がある】。

保育者の語り⑪

最初に説明の紙が付いてたのでそれを読んで、リ
スクとハザードってそういう考え方でやってくん
だなっていうふうに思ってた

これまで、リスクとハザードという概念は知ら
なかったものの、チェックリストの説明部分を読む
ことにより、すぐに取り除くべき危険であるのか、
子どもの成長・発達にとって必要な危険であるのか
という新たな視点により安全を考えることができ
るようになったと言える【リスクとハザードを区別
して安全について考えることができる】。

保育者の語り⑫

現状として安全管理をなされておるものを一応、
ハザードじゃなくてリスクの高い遊具っていうだ
けなので

チェックリストの説明部分を読むことによりリ
スクとハザードの概念が理解できたとしても、実際
にチェックリストを使用してみると、業者から購入
した遊具等は安全基準を満たしているため、ハザ
ードになることはない理解していたり、木製の棚の
ささくれについてリスクと理解している保育者も
いたりすることが分かった【リスクとハザードの違
いについて正しく理解することが難しい】。

保育者の語り⑬

例えば2歳児にとって、さっきの飛び越えるじゃ
ないですけど、ぴよん、ぴよんとやっていけばいい
ような、年少さん、年中さん、年長さんにとっては
必要な坂とか、でこぼこであっても、2歳さんにと
っては、まだ必要ではないということも。

同じような園庭の環境であっても、5歳児が使う
場合ではリスクであるが、2歳児が使う場合はハザ
ードではないかという意見が出されていた。さらに、
同じ年齢のクラスであっても、発達の差によっては
ある子にとってはリスクであり、また別の子にとっ
てはハザードという場合も考えられるなど、一概に
リスクかハザードかということが区別できない状
況があることが分かった【クラスの状況や子どもの
発達年齢によって一定ではない】。

保育者の語り⑭

これ見とけば、まずは自分が気を付けることが分
かる。

各保育者がその園の環境や状況を見て考えた危
険内容や要因とそれに対する対応方法が記載され
ているものがリストアップされることにより、この
園ではどこに気を付けて、どのように対応していけ
ば良いのかがすぐに把握することができるという
利点があると理解していることが明らかとなった
【危険内容と要因、対処方法が整理できる】。

保育者の語り⑮

職員間で話し合いをしたことで、先輩の先生方の
意見を知ることができた

子ども空間安全チェックリストを使って話し合
いをする事によって、それぞれの保育者の保育観
や子ども観や考え方などに気付くきっかけとなっ
ていることが明らかになった【話し合うことで他の
保育者の思いを知ることができる】。

保育者の語り⑯

なんか急に新人のこと、ばさって言えないし、「私
は違うと思います」ともなかなか言いにくくて、ち
よっとそのままベテランの先生に受け渡して、うま
く私たちが頑張ろうねっていう形にもっていって
もらったんですけど。

話し合いの中で、実際には思っていることがあ
っても、保育経験年数の短い保育者は経験年数の長い

保育者に対しては意見が言い難かったり、新人保育者を傷つけてはいけないと思い、本音が言えなかったりという園内の人間関係がある場合には、特定の保育者の意見ばかりが採用されたり、意見を出し合えず有意義な話し合いにならなかつたりする可能性があることを示唆していると考えられる【本音を言えない園内の関係があると上手く機能しにくい】。

(2) 子ども空間安全チェックリストを使用したことによる保育者の変化

ここでは、子ども空間安全チェックリストを使用した際にどのような変化が起きたかを分析することによって有効性を検討していく。

保育者の語り①

子どもたちの発達を促す要素が含まれるものということが書かれたことによって、すごく見方が変わりました

保育者の語り②

行っちゃいけないんだよじゃなくて、危ないんじゃない？とかいうことを子どもたちが言うようなところは、私たちがそんなふうに声掛けが、行かないんだよ、だけじゃなくてっていうところが保育の中で少し細かく出てくるというか

保育者の語り③

実践をしてきて、やっぱり子どもたちの中でだいぶ浸透のほうがしてるので、そういうのは変わってこれてる

通常、安全チェックリストと言うと、安全が危険かという二者択一的な判断になる傾向がある。本研究における子ども空間安全とは安全でありながらも、夢中になれる空間であり、居心地の好い空間であることを指している。「リスクは、遊びの楽しみの要素で冒険や挑戦の対象となり、子どもの発達にとって必要な危険性は遊びの価値のひとつである。」¹²⁾と述べられているように子どもが夢中になる遊びには危険が伴うことも多い。そのため、危険だから取り除こうという議論から、子どもの発達のためには必要な危険であるため、それを経験する意味について議論することにつながっていることが読み取れる。ここでは、子ども達が危険な場所や行動等について意識をして、自分たち自身で安全について考えたり、危険であるかそうでないかを判断する力を身に付けたりしていくことが必要であると保育

者が意識するようになったことにより、子どもの行動規制により危険の取り除くという行動規制から子ども自身が考えることのできるような声掛けをするという意識と援助の変化が起こったと考えられる。

保育者の語り④

明らかに危険な場所っていうことや、そういうことをみんなが共通して思ったことなんかは、こういう機会にちょっと改善の一步を自分たちなりにやってみたり、ああ、そうね、そこが危ないわねっていうことを改めて

保育者の語り⑤

戸外についてはハザードの部分が多いので、すぐに対処したり、取り除く必要があるなということも分かりましたので

保育者の語り⑥

意見が出てきた内容については、やっぱり先生たち、少しずつ改善に動いてくれているのは感じます。

日々の保育の中では危険であると感じているにも関わらず対処されていない問題は多くあると考えられる。特に、既存の安全チェックリストにない項目については、定期的な見直しの機会が無く、保育者個人の努力に依存する形となる。一方で、子ども空間安全チェックリストにより危険な事例として会議で挙げられることにより、園全体でその危険を認識するだけでなく、すぐに取り除くべきハザードはすぐに対処する必要があると判断されることにより即時に対応される。また、一度に全ての危険に対応することは難しい場合であっても、ハザードやリスクのレベルの高いものから対応していくという優先順位をつけることができるため、どこから対応すべきかが明確になる。これらの理由から、保育者が危険だと感じている事例について対応するきっかけとなっていると言える。

保育者の語り⑦

園長、主任とかが OK だと思っても、現場は、いや、ちょっとここは危ないんだけどなと思ってるんだらうなっていうのは分かったので、職員の声聞いてかんといかんなど

保育者の語り⑧

普段だったら到底、分かりにくいようなところで、
そういう危なさがここにはあるんだねって

ここでは、各自の視点から危険内容と要因、そして対応方法を考えて記載するため、それぞれがどのような部分に関心があり、どのような考え方があるのかについて、改めて気付くことができる機会となっていることが読み取れる。通常の話し合いの中では危険だと思っけていても、園長や主任には直接言いにくい場合があると考えられる。しかし、自分はこのような部分が危険だと感じており、このような形で対応する必要があるという形であれば、批判的に受け止められにくく、自分自身の考えとして会議にも出しやすくなるということが読み取れる。さらに、経験年数の短い保育者だけでなく、経験年数の長い保育者においても、それぞれの考えの違いに気付いたり、自分の意識・関心のなかった部分についても知る機会となったりすることで、安全に関する多様な視点の獲得につながっていると考えられる。

保育者の語り⑨

やっぱり変化はあったと思っけて。普段、何気なく過っけてしている場所もけがのリスクがあると思っけて、慎重に自分も意識して見ないとなっけていうふうに心掛けるようにはなっけてかなとは思っけて。

保育者の語り⑩

改めてこの保育園の危ない点を見返すことができて、日頃もバタバタ忙しく保育しちゃっけて、その点に気付けてなっけてたので、こうやっけて書き出すことで、他の先生の意見も聞っけて、ああ、ここが危ないな、ちよっけて気を付けようかなと思っけてたことがあっけて。

子ども空間安全チェックリストでは保育者自身が危険だと思っけて内容と要因を探すことだけでなく、それを分析し、どのように対応していけば良いのかを考へるというプロセスを経る必要がある。そのため、自然と園内の環境や保育内容を見直すきっかけとなると考へられる。さらに、他の保育者の危険だと思っけて内容を聞きその部分を意識するだけでなく、普段は見落としていたと考へられるリスクにも気付くきっかけとなっけてたり、危険内容と要因、対応方法を書くことでこの部分は気を付けてようと思っけてたりすることを通して、結果的に日常的な安全

意識が高まっけてと言へる。

保育者の語り⑪

やっけてし年齢が上がれば、それなりに気を付けて遊ぶっけていうこともあるんですけども、集団の中でこの年齢はいいけどこの年齢はちよっけて駄目っけて言っけてると、その辺の境っけていっけてたところが難しくなっけてくるので、あえて（ハザード）っけていう形ではさっけてもらっけてたと思っけています、話し合いの中で。

実際に、同じ遊具やおもちゃを使用する場面であってもその状況によってリスクのレベルやハザードになりうるということが話し合いの中で出てきた場合に、安全重視思考の保育者が多い場合には、リスクではなくハザードに分類されてしまっけて、リスクとしてどのように保育者が対応し、環境を整へるのかという話し合いに発展せず、結果的に子ども達の遊びの幅が狭まっけてたり、禁止事項が増えっけてしまっけてたりすることにつながる可能性があることが明らかとなっけてた。

保育者の語り⑫

どうして積んどいちゃ駄目なのかなとか、どうして高いところに、誰もいないんだからいいじゃないっけていうことを私が説明するよりはみんなで共通で認識ができたことで気を付けてもらえたかなっけてっけてすごい思っけてう

保育者の語り⑬

取り組み自体を考へるようになっけてたり、そのことと単純に子どもが発達してないっけていうだけじゃなく、その成長に合わせたりっけていうことを考へるようになっけてた

保育の中で経験的に大丈夫であろうと判断していた危険やその環境を見た際に安全か危険かを判断していたという意識に対して、子どもの時期や発達によっては同じ環境であってもリスクになりうるということに気付くきっかけになっけてている。つまり、安全か危険かを判断する際には、環境の面だけを考へずれば良いのではなく、その環境で実際に過っけてしている子どもたちにとって安全であるか、危険であるかという視点から現状の子ども達の姿と照らし合わせっけて考へるという意識の変化が起っけてていることが読み取れた。

4. まとめと課題

本研究の発端は、従来の安全チェックリストとは異なる独自のチェックリストを作成したい、という思いであった。すなわち、「安全な空間」と「居心地のいい空間」と「子どもの冒険心をかきたて夢中になって遊べる空間」の3つの要素が融合された空間、すなわち「子ども好適空間」であるか否かをチェックできるリストの作成を試みたのである。

上記の3つの空間の要素は、一見相反する要素であるように思われ融合は容易でないと想像するに難くない。しかし、研究の結果として作成したチェックリストの試行的実施の過程で、実現の可能性があるを見てきた、と言える。

本研究の方法は、アンケートとインタビュー調査、及び保育者の語りの分析である。そして、研究協力者に実際にチェックリストを使用していただき、有効性や問題点を解決するプロセスを経てチェックリストを完成させる、という極めて実践的な手法を採った研究である。

その結果、試作した「子ども空間安全チェックリスト」は、すでに述べたように従来の目的や基準の確認のための安全チェックリストとは異なり、保育者の協働性によって生み出された子ども理解や子どもの行動理解と深く関わるチェックリストとして作成することができた。

本研究で目指した3つの視点、すなわち「各園の設備環境や子どもの姿が反映できること」「リスクとハザードの整理ができること」「保育者同士が意見交換し共通認識をもてること」の3つの視点を含めるチェックリストの作成という当初の狙いは達成できたと思う。

今後の課題は、これまでの実施協力園をはじめ多くの保育所、幼稚園、子ども園の保育者の方々に「子ども空間安全チェックリスト」を使用していただき、課題を抽出し解決すべく精査を続けることで、より精度の高いチェックリストにブラッシュアップしていくことである。

なお、本研究の成果は「子ども空間安全チェックリスト」として、別途刊行することとなった。

[謝辞]

本研究にご協力いただきましたA市の保育課の職員の方々、そして、チェックリストやインタビュー調査の実践をしてくださった園長先生をはじめとする保育者の皆様に深く感謝申し上げます。

執筆担当は以下の通り

横田：1

野田：2-1

櫻井：2-2、3-1、3-2

林：4

[引用文献]

- 1) 消費者庁(2018)「消費者白書平成30年度版」
https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_research/white_paper/2018/ (最終閲覧日:2020年2月25日)
- 2) 厚生労働省「平成30年(2018)人口動態統計月報年計(概数)の概況」第7表、p.36
- 3) 内閣府子ども・子育て本部(2019)「平成30年教育・保育施設等における事故報告集計」
https://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/outline/pdf/h30-jiko_taisaku.pdf (最終閲覧日:2020年2月25日)
- 4) 国土交通省(2014)『都市公園における遊具の安全確保に関する指針(改定第2版)』p.8 最終確認2020年1月3日
(<https://www.mlit.go.jp/common/000022126.pdf>)
- 5) 田中哲郎(2019)「保育園における事故防止と安全保育 第2版」日本小児医事出版社、pp.83-134
- 6) 平成27年度教育・保育施設等の事故防止のためのガイドライン等に関する調査研究事業検討委員会(2016)「教育・保育施設等における事故防止及び事故発生時の対応のためのガイドライン【事故防止のための取組み】～施設・事業者向け～」pp.39-53
- 7) 内閣府(2018)「教育・保育施設等における重大事故防止策を考える有識者会議 年次報告(平成30年7月)」pp.26-29
- 8) 前掲5) p.7
- 9) 前掲7) p.33
- 10) 伊東知之、大野木裕明、石川昭義(2017)「子どもの事故防止に関するヒヤリハット体験の共有化と教材開発—保育・幼児教育の現職者と実習大学生のキャリア発達から」福村出版 p.159
- 11) 横田典子(2019)「保育現場の危険事例と保育者の意識に関する考察—「ヒヤリ、ハット」事例のデータベース化と安全チェックリストの作成に向けて—」岡崎女子短期大学『子ども好適空間研究 Vol.1』pp.46-55
- 12) 前掲4)